みんなと違うということ

天童市立第三中学校　一年　岩月　福人

僕は吃音です。僕は吃音という発声障害を持っています。どのような障害かというと「あっあっあ」などのように、音を話すときに何回も繰り返してしまったり、「んー」などのように言葉を出せずに間があいてしまったりする障害です。「普通に喋りたい」と僕はいつもそう思っていました。

でも吃音が原因で馬鹿にされたり、いじめられたりすることはありませんでした。みんながとても優しく吃音である自分を受け入れてくれました。そのおかげで今僕はとても楽しく過ごせています。

中学校に入学してからは吃音について聞かれることはありましたが、馬鹿にされたりすることはありませんでした。しかしある時友達と喧嘩して自分のコンプレックスである吃音の真似をされ馬鹿にされました。僕はとても悲しかったです。それと同時に「なんで人はみんなと違うところを馬鹿にするのだろう。」と思いました。そして小学校六年生の時、道徳の授業や社会科の授業であった差別のことを思い出しました。道徳の授業では黒人奴隷についての話を学びました。昔黒人だからという理由で人身売買されたり、奴隷として扱われたりした話を読みました。その時はあまり深くは考えませんでしたが、今思えばなぜ黒人というだけで白人に差別を受けるのだろうと思いました。社会の授業では女性が差別を受ける学習をしました。明治初期の日本は、女性は選挙に参加させてもらえないというものでした。

これらを思い出して僕はこう思いました。

「別に黒人でも女性でも、障害などのコンプレックスを持っている人でも同じ人間なのだから差別をしたり、馬鹿にしたりしなくていいのに、なぜそうするのだろう？差別をしたり馬鹿にしたりしても悲しい思いをする人がいるだけで、誰も得なんてしないのに。」と思いました。

僕はなぜ人は人のことを馬鹿にしてしまうのかを考えてみました。そして思いついたのは、「みんなと違う部分があるから」や、「あいつだけなんかおかしい」などと自分やみんなと違っている部分、劣っている部分を見つけるからだと思いました。人が他の人と違うことなんてたくさんあります。でも人は他の人との違いを見つけ、無意識に人を馬鹿にします。言葉はとても便利ですが、時に人を傷つけ、殺すことだってできるナイフになります。だからこそ、自分が無意識に人のことを馬鹿にしていないかを考えていかなければならないと思います。みんなの心が一つになって互いを助け合い、協力して共に困難を乗り越えていける関係こそが、僕は心の輪だと考えています。

人を馬鹿にするということは、相手のことを殴ったり、ナイフで刺したりしているのと一緒です。だから人を馬鹿にしたりしない社会を作っていきたいです。そして僕は、吃音だからとあきらめないで、いろいろなことに挑戦して、さまざまな経験を積んでいく生き方をしたいです。